

黙示録16章12-21節 「神の大いなる戦いの日」

1A ハルマゲドン 12-16

- 1B 東からの王たち 12
- 2B かえるのような汚れた霊 13-14
- 3B 盗人のように到来される主 15
- 4B メギドの丘 16

2A 大地震 17-21

- 1B 事の成就 17
- 2B 大地震 18-20
 - 1C 史上最大 18
 - 2C 大バビロンの崩壊 19
 - 3C 山々と島々の消失 20
- 3B 激しい雹の災害 21

本文

黙示録 16 章を開きましょう、今晚は後半部分、12 節から 21 節までを見て行きます。ついに、神の災いの最後を見ます。私たちは、前回、最後の七つの災害の初めの五つを見ました。それは主に、獣の国とその住民に対するものでした。第一の鉢は地に向けられ、その住民に酷い悪性の腫れ物ができました。第二の鉢は、海にぶちまけられて、それが血に変わりました。第三の鉢は、川と水の源に向けられました。それで人々が、血に変わったその水を飲まなければならなくなりました。これらのことは、彼らが聖徒たちを迫害し、血を流したことに対する報いであるとあります。聖徒たちに対する悪に対して、神が正しく報いておられるということです。そして第四の鉢は、太陽に向けられて、太陽の激しい炎熱で獣の国の住民は苦しみ悶えました。第五の鉢は、獣の座に向けられました。それで国全体が暗くなり、そこでも住民は苦しみました。ここで驚くことは、彼らは悔い改めていないことです。神の憐れみを呼び求めて叫んでいないことです。むしろ、災害をも支配する権威を持つ方に対して、汚しごとを話していました。すべてのもの源であられる神を知る、また知ろうとしないの違いです。

1A ハルマゲドン 12-16

そして、第六の鉢による災いですが、獣の国の支配者が、最後のあがきをする準備をするところです。これだけの災害を受けて、神とキリストご自身に対して戦争をしかける、ハルマゲドンの戦いの始まりです。

1B 東からの王たち 12

12 第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かかれてしまった。

鉢は、「大ユーフラテス川にぶちまけ」られました。以前にも、9章14節でユーフラテス川のほとりにつながれている四人の天使が解き放たれて、二億の軍隊が人類の四分の一を殺した災いがありました。けれども、これは異なる出来事です。ユーフラテス川というのは、聖書の中で初めから終わりまで出て来る川です。創世記2章、エデンの園からの四つの川で、その主流になっているものがユーフラテス川でした。今は、その源流はトルコ北東部の山地から出ており、シリアを通過し、イラクでティグリス川に合流してペルシヤ湾に注がれます。全長約三千^{キロ}の国際河川です。それから、主がアブラハムに対して、彼に与えると約束された土地は、エジプトの川から、ユーフラテス川までというものでした(申命15:18)。この境界線は、今のシリア、ユーフラテス川の上流地域のことを指しているのでしょう。そして、後で出て来るバビロンは、この川の下流地域にあります。

そして、その川をさらに越えたところが「日の出るほう」というのは、はるか東にある国々であり、この戦いが全世界を巻き込むものであることが分かります。そして事実、西方のローマ帝国は、ユーフラテス川があったので、東からの勢力の進出をあまり気にすることなく統治することができていました。しかし今、この川が涸れたということは、一気にイスラエルと周辺が世界規模の軍事衝突が起こる危険性が増し加わります。気になるのは、ユーフラテス川の水量が非常に減っていることです。大患難においては、一気に減って、そのまま軍事進出ができるでしょう。そして東からの王たちですが、アジア諸国の世界戦略は中東へと引きつけられています。今、中国は一帶一路という世界戦略を持っています。かつてのシルクロードに模した経済圏を広げるものです。そしてその要所に、軍事的拠点も置こうとしています。日本もかつては、第二次世界大戦の時にインドの国境まで勢力を広げました。終わりの日は、このような動きが一気に加速化します。

2B かえるのような汚れた霊 13-14

13 また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。14 彼らはしるしを行なう悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

獣の国の座が鉢によって壊された今、獣の国の支配者が最後のあがきをします。獣とは、反キリストのことです。反キリストに力と権威と位を与えたのは竜、悪魔です。そして反キリストの代理人として、しるしや不思議を行ない、獣の像を拝ませたのは偽預言者です。そのトリオ、云わば偽の三位一体が動いて、全世界の王たちを惑わします。その方法ですが、「かえるのような汚れた霊ども」です。かえるは、レビ記11章では汚れた動物とされています。水の中において、鱗やうろこのないものの範疇に入ります。けれども、またなぜ、かえるのような悪霊になるのでしょうか？ある

聖書教師は、これは「軍隊の進出をよく表しているのではないか」と言っていました。軍隊が遠征する時は、あるところまで行ってそこを拠点化して、それからまた前進して他のところを拠点化します。その様子が、かえるが飛び跳ねて移動している様に似ているからではないか、ということです。

そして、彼らが行なうのは「しるし」です。これは、世の終わりの時の特徴です。「2テサロニケ人 2:9-10 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。」私たちは、基本的に世俗的な社会に生きています。つまり、超自然的なことは受け入れない社会に生きています。けれども、世に天変地異が起こり始め、国々も激しく騒ぎ立ち、その中で合理主義では説明できないことがたくさん出てきています。しかし、その拠り所を、イエス・キリストの福音以外のところで求めていくとき、世界の指導者たちまでが不思議や徴に惑わされる時がやってきます。

しかし驚くべきことは、これが彼らの戦いではなく、むしろ全ての出来事が、完全に神が掌握しておられる、神の大いなる戦いだということです。「万物の支配者である神の大いなる日の戦い」と言っています。彼らが神ご自身に対して戦いをいどむために集められるのですが、しかしそのことをさえ神はご存知で、その戦いによって神は彼らに裁きを下されます。

このように、神とキリストに反抗して、王たちが一つになって反抗するということは、詩篇第二篇で預言されています。「詩篇 2:1-6 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者にと逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」」そして、ヨエル書 3 章にも、国々が神によって集められることが預言されています。「ヨエル 3:9-12 諸国の民の間で、こう叫べ。聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。すべての戦士たちを集めて上らせよ。あなたがたの鍬を剣に、あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。弱い者に「私は勇士だ。」と言わせよ。回りのすべての国々よ。急いで来て、そこに集まれ。…主よ。あなたの勇士たちを下してください。…諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。」

イスラエルの歴史の中で、既にこの動きに似たものが起こっていました。ヨシュアたちが約束の地に入ってからのことです。彼らはエリコとアイを陥落させました。すると王たちは一つになって、集まって戦おうとしています。「ヨシュア 9:1-2 さて、ヨルダン川のこちら側の山地、低地、およびレバノンの前の大海の全沿岸のヘテ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の王たちはみな、これを聞き、相集まり、一つになってヨシュアおよびイスラエルと戦おうとした。」彼らは南

の王たちでしたが、この後でハツオルの王を中心とする北の王たちが、相集まって攻めて来ました(14章 1-5節)。その度に、ヨシュアたちは一挙に彼らを打ち倒すことができました。ですから、彼らは神の働きに相集まって戦いをいどむのですが、その戦いがかえって彼らが一挙に滅ぼされる神の裁きとなっているのです。

人間は、国ごと、民族、国語、いろいろな階層、またいろいろな信条や思想などによって、それぞれが対立しているかのように見えます。けれども、根本においては二種類の人々しかいませえん。それは、全ての支配者である神に自分を明け渡した者か、あるいは反抗しているかの違いです。イエス様が十字架に付けられる時に、いつも仲違いしていたヘロデ王とローマ総督ピラトが仲良くなったということを思い出してください。いつもは対立しているのに、神とキリストのことになれば一つになって反抗することができるのです。「偽りの一致、サタンによる一致」と言ってよいでしょう。初代教会の人々は、自分たちが迫害を受けた時に、詩篇二篇を取り上げてこのことを祈りました。「使徒 4:25-28 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。」

3B 盗人のように到来される主 15

15 ..見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。・

イエス様は、ご自分が来られる時が近づいていることを、ハルマゲドンの戦いの預言を与えておられる途中でご自身が語っておられます。思い出してください、黙示録は、イエス・キリストの黙示です。すべての出来事は、この方を預言するためにあります。19章 10節に「イエスのあかしは預言の霊です。」とあります。イエス様は、ご自身が盗人のように、突如として来られることを警告しておられました。「マタイ 24:42-44 だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」ハルマゲドンの戦いにおいて、主が最後に天から現れるのですが、それは地上再臨です。この時に、突如として来られるのではなく、主が思いがけない時に来られるのは、空中再臨です。教会の携挙です。これらの恐ろしい出来事から免れるために、主が戻って来られるのです。そこでイエス様は、オリーブ山において、「目を覚ましていなさい、用意していなさい」と繰り返して、励まされました。

そして、「身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸い」と言われています。当時、番兵は任務中に寝ているのが見つかり、罰を受けたのだそうです。その罰は着ている物を脱がされ、裸で歩かされるという恥辱です。そのようにならない者は幸いであると主は言われます。これは、イエス・キリストを着物のように身につけていることです。パウロが主が戻って来られることについて、次のように話しました。「ローマ 13:12-14 夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」

4B メギドの丘 16

16 こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

「ハルマゲドン」というのは、二つのヘブル語によって成り立っています。ハルが山、マゲドンはメギドのことを表しています。ですので、メギドの山という意味です。メギドの山あるいは丘は、イスラエルのイズレエル平野の西、カルメル山脈のふもとにあります。イズレエル平野は、南北に山地が走っているイスラエルの土地において、東から西へ、また西から東へ渡るのに適している平地になっています。そしてイスラエル自体が、南はエジプト、北はユーフラテス川でその向こうにアッシリアやバビロンなどの、メソポタミア地方がある、二つの文明圏に挟まれたところにあります。貿易のための国際幹線道路である、海沿いの道「ヴィア・マリス」は、エジプトから地中海沿いを北上し、そしてイズレエル平野を横切って、ガリラヤ湖のカペナウムに行き、それからダマスコに行くのです。そのために、聖書時代の初期からずっと、実に現代に至るまで、そこが軍事衝突の要所ともなっていました。

古代は、エジプトのパロ、トトメス三世が北上してカナン連合軍をメギドで倒した、紀元前 1468 年のメギドの戦いの記録があります。そして、イズレエル平野で行われた戦いが数知れませんが、デボラとバラクが、カナン人の将軍シセラと戦った時、シセラはカルメル山沿いのキシオン川のところで倒れています。そしてヨシヤの時代、エジプトのパロであるネコが、カルケミシュの戦いでバビロンと戦おうとして北上した時、ヨシヤが戦いに臨んだのでメギドで倒れています。そしてメギド自体が、ソロモンの時代に要塞の町として立てられていました。その他も、数多くの戦いがありましたが、そして、近代において 1917 年、オスマン・トルコが英国と戦い、このメギドで衝突しました。将軍アレンビーは「メギドの主」という称号まで受けました。紀元前 1468 年から 1917 年までの間、この辺りで実に二百以上の戦いがあったと言われています。

ですから、ハルマゲドンと言いますと、何か象徴的な用語のように使われますが、そのようなものではありません。イスラエルのメギドに、全世界の王たちが集結して、それから神とキリストに戦いを挑むようになる最初の集結地点なのです。

2A 大地震 17-21

1B 事の成就 17

17 第七の御使いが鉢を空中にぶちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した。」と言った。

神がついに、最後の鉢をぶちまけさせました。「空中」にぶちまけさせていますね、次にいなくまと雷鳴があるので、そうだとも言えます。けれども、空中は、悪魔は悪霊どもが支配していた領域で(エペソ 2:2)そこに影響を与えるためであったとも考えられます。そして、主なる神ご自身が御座から大きな声を上げておられます。聖所から出て来たとありますが、「事は成就した。」です。これで全てのことが終わりました。小羊が父なる神から巻き物を受け取って、その封印を解いた全ての事柄がここで成就したということです。ここがクライマックス、全てのものが集結し、集約され、そして完成します。

2B 大地震 18-20

1C 史上最大 18

18 すると、いなくまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほどに大きな、強い地震であった。

大患難の終わりには、ここにあるように最も激しい天変地異が起こります。イエス様は、オリーブ山でこう説明されました。「ルカ 21:25-26 そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。」黙示録は地震だけ記していますが、天も激しく揺り動かされるようなものです。地震ならず「天震」と言えばよいでしょうか、地も天も激しく揺れ動きます。そして、これが人類の歴史最大の地震になります。

2C 大バビロンの崩壊 19

19 また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

次の 17-18 章で、主は詳しく、大バビロンの姿を見せられます。終わりの日に残っている神に反抗する存在は、獣の国だけでなく、ここにあるようにバビロンがあります。この大地震は、人間の高ぶりを潰すために、バビロンを始め人間の数々の町々を倒すためのものでした。そして、バビロンは、徹底的に、完全に、神の怒りを余すところなく受けることになります。

3C 山々と島々の消失 20

20 島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった。

七つの封印のうち第六の封印が解かれた時に、大地震が起こり、「すべての山や島がその場所から移された。(6:14)」とありました。けれどもここでは、もうすべて見えなくなったとあり、場所が移されたところではない天変地異が起こっています。このことによって主が何をされているのかと言いますと、イザヤ書には、「地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。(13:9)」とあります。また、「13:11 わたしは、その悪のために世を罰し、その罪のために悪者を罰する。不遜な者の誇りをやめさせ、横暴な者の高ぶりを低くする。」とあります。私たちが自分たちに何かがあるという高ぶり、自分で自分を救おうとする高ぶり、これの根底を大地震によって崩すわけです。

3B 激しい雹の災害 21

21 また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

雹による災いです。私たちは今年、夏なのに大きな雹が降ってきました。ここで「一タラント」は35kgですから、おそろしいほど大きな雹が人々の上に降ってきます。けれどもなおかつ、彼らは神にけがしごとを言います。これほどまでに恐ろしいことは、神以外にはできないことを、彼らは認めざるを得ません。けれども、それによって彼らは神に悔い改めるのではなく、むしろけなすのです。これが、悔い改めの余地が残されていない、頑なな心の状態であります。私たちはどこかで、「この人にもっと機会が与えられていたら、悔い改めるかもしれない。」という期待を抱いてしまいます。しかし、地上において地獄を云わば経験しているのに、それでも悔い改めないのです。これが、永遠の地獄の姿でもあります。非常に苦しくて歯ざしりさえしました。しかし、神を罵ることしかしません。神は憐れみを示されても、それを拒む者たちは、憐れみ無しの裁きです。